

言語感覚を磨く俳句の指導

——「切れ」を意識して——

藤 田 万喜子

一、はじめに

言語感覚という学習指導要領国語科の目標に記された言葉に着目して、それを俳句という文芸を通して磨く指導の試みを「岐阜聖徳学園大学国語国文」で、「言語感覚を磨く俳句の指導——埋め字の方法を用いて——」（第24号）、「俳句創作指導における実践と提案——取り合わせの方法を用いて——」（第25号）、「俳句創作指導における実践と提案——重複表現を推敲の視点として——」（第26号）と提案してきて今回で四回目を重ねることになった。

今回は、俳句の技法の一つである「切れ」を意識しての鑑賞指導について提案したい。

二、俳句における「切れ」

まず、俳句における「切れ」の捉え方をまとめておきたい。

『俳文学大辞典』（角川書店 平成10・6刊）では、山下一海が「切れ」を次のように説明する。

俳句用語。一句の中で強く言い切られるところ。俳句は短いために、ただ言い続けたのでは、文の断片としか感じられない場合がある。一句の自立する効果を上げるためには句の途中、あるいは句末を強く言い切ることによって、そこに詠嘆の気持ちを込めることが有効である。俳諧の発句は、代表的な切れ字「や」「かな」「けり」を多用して切れの効果を上げたが、近代俳句においてそれらは古臭いと感じられ、避けられることが多かった。当然に句の切れが悪くなるので、伝統的な切れ字を用いずに句を切ることが必要になった。例えば「積にて白桃むけば水過ぎゆく」（森澄雄）において、「白桃むくや」とすれば切れ字「や」によって切れるところだが、あえて「ば」としながらもそこに切れの効果を見せ、「雪はしづかにゆたか

にはやし屍室」(石田波郷)において、「ゆたかにはやき」として文を続けることなく、わざと「はやし」としてそこに切れの効果を上げるようにしている。

『俳句実作の基礎用語』(富士見書房 平15・7刊)には、小川軽舟が、「や」「かな」「けり」に代表される「切れ字」は俳句の句中または句末で強く言い切るために用いる言葉であり、「切れ」は句中または句末で強く言い切られた箇所をいうとして、

秋風や模様がちがふ皿二つ

原 石鼎

遠山に日の当りたる枯野かな

高浜 虚子

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

飯田 蛇笏

を挙げて説明している。先の三句では、それぞれ切れ字の後に「切れ」がある。第一句では、上五の後の切れが一句の中に大きな余白を生じ、季語が作品全体の主張を象徴する効果をあげている。第二句、第三句では、句末の切れが読後に深い余韻を生む効果を指摘する。更に、「切れ」は切れ字のある場所に限られるわけではないとして、

霜柱俳句は切字響きけり

石田 波郷

の句の場合、句末の切れとは別に、「霜柱」の後にも切れがあると説明して、「句中の切れと配合の手法を結びつけて季語の象徴性を高める技法」だとする。

以上から俳句における「切れ」の重要性が理解できるが、外山滋比古は、散文を意識して俳句における「切れ」について、『外山滋比古著作集6短詩型の文学』(みすず書房 平15・1刊)の中で次のように説明している。

・「断切の意識の文字にあらわれたものが、切れ字である。しかし、断切のリズムは切れ字によらなければ表現できないとするのは当たらない。切れ字によらず、また、他のいかなる文字にもよらずに断切感をあらわすことはできる。その場合も、『切れて』いるのである。これは、切れ字による切れに対してゼロ型式の切れ字と考えられる。」「切れ字こそ俳句における省略の詩学の指標で、切れ字によって、俳句は平俗なことばを自由に駆使しながらも、散文的空虚、平板に墜することを避けることができるのである。」「(省略の文学―切れ字論)」

・「俳句は現在、印刷文芸である。とすれば、句読点を必要とするはずだ。しかるに、つけていない。」「点と丸のはたらきの主たるものは、表現に区切りをつけることである。ところが、俳句には五七五という基本的区切りが枠として与えられている。『古池や、蛙飛び込む、水の音。』などとすれば、点も丸も蛇足である。俳句には句読点が内在している。目に見えない句読点がついているとしてもよい。『切れ字』もそういう目に見えない句読点とし

て重要である。」(「点と丸」)

- ・「切れれば言葉に間ができる。沈黙である。これは決してたんなる表現の欠如ではない。ゼロという形式によるひとつのりっぱな表現である。」「沈黙は積極的な表現力をもっているわけだが、すべてを言語にしないと承知できないリアリズムのために、いわば日蔭者になってきているにすぎない。切られた言葉が大きな表現効果をもつのは、それにつづく沈黙の空間で残響が増幅されるからである。切れずに連続している表現では次の語の干渉によって消えてしまうような余韻が切れ字の空白に出会うとたっぷり發揮される。切れ字はいわば楽器の共鳴箱のような役割をしている。かすかな絃の振動音も共鳴箱で大きな音にされるが、言葉に豊かな余韻を生ずるには、どうしても切る必要がある。」(「切れ字断章」)
- これらをまとめると、俳句は五七五という切れを内在しているが、切れ字を含めた「切れ」(意味的な切れ)は、
- ・切れは句中或は句末に位置し、切断の意識の現れである
- ・俳句という文芸では意識的に用いられる表現方法である
- ・伝統的な切れ字で切る場合とそれを用いずに言い切る形で切る場合がある

・切れることによって「間」(空白、余白、沈黙の空間)が生れ、

「間」は省略であって、連想が広がり、深い(豊かな)余韻を生

む効果があり、そこに、詠嘆(感動)の気持ちを込めたり、象徴性を高めたりすることができ、句柄が大きくなる

- ・散文的・説明的でなくなり(韻文的となり)、言葉が生きる
- ・リズムがよくなる

という特性と効果を持っている。

「切れ」は散文の言語感覚とは異なる、短詩型である俳句の特殊性から生れた言語感覚なのである。

三、教科書における「切れ」の取り扱われ方

俳句指導に当り、中学校の教科書で「切れ」がどのように扱われているかを調べてみた。中学校の教科書(平18刊)は五種ある。

◇学校図書では、学びの窓に

④句切れに注意して音読しよう。

とあるのみで、切れ字の説明をしていない。

◇教育出版では、「俳句とは」の中で「句切れと切字」の項目を立てて、

一句の中で、切れめにあたるところを句切れといいます。言葉のつながりや意味の切れめが句切れとなります。句切れには次のようなものがあります。

●初句切れ(五／七・五)

●中切れ(五・二)五/五(二・五)

●二句切れ(五・七/五)

●句切れなし(五・七・五)

と、「句切れ」の語を用いて示し、それぞれに一句ずつ例句を挙げている。さらに、

また、俳句には切れ字と呼ばれるいくつかの言葉があります。切れ字には、句の表現をいったんそこで切って、余情や感動を表すはたらきがあります。したがって、切れ字の現れたところは必ず句切れになります。たとえば「や」「か」「かな」「なり」「たり」「けり」「ぞ」「ぬ」「よ」などは切れ字です。

と、用い方や効果の説明をしている。

◇光村図書は、宇多喜代子の文章「俳句の可能性」の中で、
いいたいことがたくさんあっても、五・七・五という制約の中では全部いえない。冒頭の句(どの子にも涼しく風の吹く日かな 飯田龍太)で、これ以上はいえないという断念を表しているのが、最後の「かな」である。俳句ではこのような「かな」や、「何々や」の「や」や、「けり」などを「切れ字」とよんでいる。
と記されている。

◇三省堂は、「俳句の世界」の「裾して山ほととぎすほしいまま」の句の説明の中で、

また、「や」「かな」「けり」のような「切れ字」と呼ばれることばによって、句の印象を深める方法がとられることもあります。
と記されている。

どの教科書も俳句の単元があり、その中で、「切れ字」について説明があつてその効果も記し、また、切れ字を含んだ例句も示すが、切れ字以外の「切れ」への言及はなかった。かろうじて、句切れを例句を挙げて示している教育出版社の教科書のみから「切れ」に対する理解への配慮がうかがえた。

そこで、採択校の多い光村図書の指導書(『国語学習指導書』上)光村図書出版 平9・2刊)の扱いを調べてみた。

「切れ字」については、
・俳句の表現方法の一つ。「や」「かな」などで意味を切断し、感動を表現する。

・連歌・俳諧の発句や近代俳句で、句の表現を完結させるために、句中または句末で意味を切り、言い切る形を作り出す語のことである。「や」「かな」などの終助詞や活用語の終止形・命令形などの類のことで、「きりじ」ともいった。発句は切れ字によって言い切られていなければならなかった。

連歌の発句は特別な句で、それ自体で完結した独立性を要求されていた。それは、発句が連歌という集団の行為のモチーフとな

る必要があったためである。すばらしい発句が初めに出版されれば、それに続けようとする意気込みもまた違ってくるのである。その発句の独立性を作り出す基本が切れ字であった。

切れ字がないと、句は完結性がなくなり、次へ続く性格をもつ連歌の途中の五七五の句となる。

切れ字は、特定の助詞や助動詞の命令形・終止形などを指すことが多いが、その種類は一定しない。二条良基作といわれる連歌の秘伝書「一紙品定」には「切れ字十八字」が示されている。「かな」「けり」「もがな」「らん」「し」「ぞ」「か」「よ」「せ」「や」「つ」「れ」「ぬ」「ず」「に」「へ」「け」「じ」の十八で、「せ」「れ」「へ」「け」は動詞の命令形活用語尾、「し」は形容詞語尾、「に」は副詞の「いかに」である。これに対し芭蕉は、いろは四十七文字すべてが切れ字となると言ったといわれる。

近代以降の俳句においては、切れ字を使わないために韻文的にならないということはないが、切れ字によって意味を切断することにより、イメージの広がりができたり、描こうとする対象が明確に定まったりすることは多い。

「切れ」については、指導上の留意点の中で、
・感動の中心になっているものと、背景になっているものを読み分けることで、句意が明らかになる場合は多い。また句によって

は、二つの事象の出会いによって独特の世界を描き出している場合もある。そうした意味で、句切れの把握は重要である。であった。

指導書であるから教師が持つべき知識が記されているのは当然かも知れないが、「切れ字」に関しては、歴史的な流れ、切れ字の種類、切れ字の効果など詳しい説明があるが、切れ字以外の「切れ」に関しては、読み（鑑賞）の指導上の留意点として句意をより理解するために「句切れの把握は重要である」とするのみで、どのようなものがそれに当るかなど例を示して説明するまでには及んでいないことが指摘できる。しかしながら、句切れの把握が必要だとしている点は注目できる。詩型の短い俳句、言い換えれば表現に制限のある俳句では、読み手が想像力でもって膨らまして解釈（鑑賞）していく必要がある。その膨らます視点の一つに「切れ」が関係しているからである。

四、実践1 「つきぬけて天上の紺曼珠沙華」の鑑賞

俳句が有季定型であるという知識を有している高校生（一八人）に次のような手順で実践を計画した。

- 1、「つきぬけて天上の紺曼珠沙華」を音読する。
- 2、「つきぬけて」の句の情景を書かせる。

- 3、曼珠沙華が「つきぬけて」いるのかを考える。
 - 4、意味の切れのところに「。(丸)」（句点）を入れる。
 - 5、「天上の紺曼珠沙華つきぬけて」との違いを確かめる。
 - 6、作者の自解を紹介し、作者が作り出そうとした世界を確認する。
- 実践結果と考察

課題 つきぬけて天上の紺曼珠沙華（山口誓子）の句の情景を説明してみましよう。

生徒の説明からは次のような結果を得た。

- (1) 曼珠沙華（彼岸花）が紺色の空をつきぬけるように赤々と咲き乱れている。
- (2) 天高く晴れ渡る空へ向かって咲く彼岸花の生き生きとした様子。

これらは、「曼珠沙華」と「つきぬけて」を結びつけて説明したもので、(1) のようにつきぬけるように咲いていると比喻と考えて説明した者は十人で半数を超えていた。(2) はつきぬけてを言い換えているが、同じイメージで捉えており、三人いた。

残りの生徒は、「曼珠沙華が一面に咲いている」とか、「曼珠沙華

がまっすぐに咲いていて」とか、「広大な空に対して曼珠沙華という小さな存在」のように書かれていて、「つきぬけて」の表現に触れて説明されていなかった。

この実践の中心的ねらいは、俳句鑑賞の折に「切れ」を意識させる点にある。いきなり、情景を説明させたのは「つきぬけてをどうイメージするか」を確認したからである。予想通りであった。続いて、意味の切れるところに「一カ所」。(丸)」（句点）を入れることを指示した。その結果は、

つきぬけてへ。天上の紺曼珠沙華 (六人)

つきぬけて天上の紺へ。曼珠沙華 (十人)

つきぬけてへ。天上の紺へ。曼珠沙華 (二人)

で、天上の紺のところを切った者が、つきぬけるように咲いていると解釈した者と同数の十人であったことは興味深いことであった。

そこで、皆さんの情景の説明に従って「。(丸)」（句点）を入れるとどうなるかと切り返した。すると、生徒達の反応が止ってしまっ

た。情景説明で多かった「曼珠沙華がつきぬけるように咲いている」と言うのであれば、

天上の紺（がある。その下で）曼珠沙華（が）つきぬけて（いる）のような表現になるのではないかと問うてみた。その後、これに「。

(丸) (句点) を付けるとどこになるかを尋ねた。生徒の答えは、
天上の紺へ。曼珠沙華(が) つきぬけて
であった。

「つきぬけて」の位置が変わってしまった点に気づかせた後、課題の句に戻り、A「つきぬけて天上の紺へ。曼珠沙華」とB「天上の紺へ。曼珠沙華つきぬけて」の二種を並べて、作者は曼珠沙華がつきぬけていると表現したのかと尋ねた。「つきぬけて」が上五に位置づけられて「天上の紺」につながるのだからBのように表現しなかったのではないことを理解することができた。最後に、作者の自解を紹介し、作者が作り出そうとした世界を確認した。

生徒達から、作者の自解の『つきぬけて天上の紺』は、くっつけて読む。つきぬけるような青天とは、昔から云う。それを私は『つきぬけて天上の紺』と云ったのだ。そんな青天に、まんじゅしゃげは、紅い薬を張って、すくくと立っている。」の言葉からAのように切れることが理解できたものの、「つきぬける天上の紺曼珠沙華」であったら、勘違いは起こらなかったという意見があった。

一連の実践から、「切れ」に注意を向けると俳句鑑賞の際に役立つということは理解したようであった。

五、実践2 「つきぬけて天上の紺曼珠沙華」の鑑賞

「つきぬけて」が曼珠沙華の茎のイメージに結びつきやすく、それが鑑賞に影響を与えることが分かったので、今度は、作句体験を活かした鑑賞の実践を試みることにした。(ここで言う作句体験とは、俳句では「切れ」を入れると効果的に表現できるということを示す。)

実践対象者は、有季定型の作句体験を持つ大学生。実践の手順は次のようにした。

- 1、「紺」「天上の」「つきぬけて」「曼珠沙華」のように言葉をばらばらに提示し、俳句を作らせる。
- 2、なぜ、このように作ったのかを説明させる。
- 3、もとの句である「つきぬけて天上の紺曼珠沙華」を示し、どう違うかを考える。
- 4、もとの句の意味の切れのところに「。(丸) (句点)」を入れる。
- 5、作者の自解を紹介し、作者が作り出そうとした世界を確認する。

実践結果と考察

課題 「紺」「天上の」「つきぬけて」「曼珠沙華」を用いて
俳句を作りましょう。

出来上がった作品は、次の二種であった。

(1) 天上の紺つきぬけて曼珠沙華

(2) 曼珠沙華天上の紺つきぬけて

両方とも、すつくと立つように咲く曼珠沙華のイメージに引きずられて「曼珠沙華」と「つきぬけて」を結びつけ、曼珠沙華が天上の紺をつきぬけていると表現したと考えられる。

この後、実践1と同様の流れで作品の読解を行ったが、経過はほぼ変わらなかった。大学生の場合も「つきぬけて」は曼珠沙華に結びついてしまい、つきぬけるような青天と指摘する者はいなかった。そこで、曼珠沙華がつきぬけていると解釈してしまう理由を考えて書いてもらった。結果は次のように分けられた。

・曼珠沙華が地上から天上に向けて立っているものであるため、天上をつきぬける曼珠沙華と解釈されてしまう。

・「天上の紺」よりもつきぬけているイメージのある「曼珠沙華」が登場しているのでややこしい。

・「つきぬけて」では直接「天上の紺」につながらない。「つきぬけて」でなく、「つきぬける」や「つきぬけた」なら「天上の紺」につながり、読み取りやすい。

・「つきぬけて」という言葉を示されると主語を見つけたくなる。主語を考えたときに、つきぬけるものとして「天上の紺」と曼珠

沙華」を比較するとどうしても「曼珠沙華」という考えしか生れない。

実践1、実践2の結果を通して考えてみると、「つきぬけて」の言い差し表現に問題があるようだ。接続助詞「て」は次に来る動作や状態を導き出す働きをするため、その後は何ごとかが続くような中途半端なイメージを与えてしまうのである。言い換えれば、(何が)つきぬけて(どうなった)と解釈することを要求するのである。また、空の青さを表現するのに「紺」という色を用いたために、つきぬけるような青天という慣用的表現に連想が直結しないということも考えられる。そのため、「つきぬけて」という言葉はつきぬけるイメージを持つ曼珠沙華と結びつきやすくなるのであろう。

作品はひとり歩きをされると言われる。作品となった場合、表現された言葉からその世界を鑑賞するわけであるので、自由な解釈が許されるのであるが、やはり、作者の意図に即した鑑賞が必要である。う。「つきぬけて」の句の場合は、作者の意図を理解して、「切れ」を意識すると

つきぬけて天上の紺へ。曼珠沙華
の感覚がすとんと腑に落ちる。

六、「つきぬけて」についての解釈

つきぬけて天上の紺曼珠沙華 誓子

この句は昭和一六年の作で、句集『七曜』に収められている。

この句の解釈がどのようになっていくかを調べてみた。

平畑静塔は、

・秋の野に歩を運んで天地の澄明に感じる季節のことである。天は

あくまで澄み切ってつきぬけるほどの紺色に徹して上にある。地

には一本二本の曼珠沙華の紅色があざやかに日を射る。地に曼珠

沙華があざやかな紅色を誇っているからこそ、上なる天の紺はつ

きぬけるように深まるのである。(『現代俳句評釈』(學燈社 昭

50・4刊)

大野林火は、

・「つきぬけて」とは思い切ったものだと思う。底抜けのよ

うな青天井の澄明さなのである。そのもとにまんじゅさげが真紅

を誇るのだ。「この句は直接は紺と赤という色彩の対象のあざや

かさであるが、『つきぬけて』というとき、作者の中で二つの色

彩は別の次元で一つに溶けあい、色彩感を超えた清浄感をもたら

している。『七月の青嶺まぢかく熔鉢炉』(前出)が、二物の力と

力の衝撃のもたらした陶酔境ならば、これは極彩の衝撃の生んだ

陶酔境である。明るく、強く、豊かな句である。」(『近代俳句の

鑑賞と批評』明治書院 昭55・8刊)

この大野林火の鑑賞と山下一海の鑑賞である、

・突き抜けたような秋空の下、曼珠沙華を見つめている作者の眼に

は、花の姿が大きくクローズ・アップされ、深い秋空に伸び、突

き刺きり、突き抜けるようにも見える。へつきぬけてへによって、

紺の空と赤の花が、中天に大きく重なって見える。

を引用して、西郷竹彦は、これらは色彩を捉えただけだと指摘し、

・何よりも卑近・卑小・卑俗な草花にすぎぬものが、まるでへつき

ぬけて天上の紺へ」と一つとなるがごとき錯覚を与えているところ

がおもしろい。ここで〈天上の紺〉は決していわゆる「秋の青空」

ではない。両者は次元のちがいがあがる。ここでの曼珠沙華は〈天

上〉天下唯我独尊の姿といえよう。幻想のキャンバスに一気に力

強く描きあげた、しかし、どこか仏画のような静寂さをも感じさ

せる句である。(『名句の美学』黎明書房 平3・11刊)

のように、宗教性を加えて解釈している。

村上冬燕は、

・「つきぬけて天上の紺」は、つきぬけるような紺の空と解すれば、

よく理解される。曼珠沙華の赤い色は、天の青さを一層青くし、

自らは赤を一層強めて天へ伸びる姿、この写生が素晴らしい。曼

珠沙華の句として絶品。(『誓子俳句365日』梅里書房 平9・

これらの解釈はすべて傍線で示したように「つきぬけて」が「天上の紺」に結びつけられているが、大野林火は「つきぬけて」というとき色が一つに溶けあうと言い、山下一海は紺の空と赤の花が「つきぬけて」によって重なって見えると述べて、色を視点に曼珠沙華にも結びつけて解釈を拓いている。

誓子自解

・「つきぬけて天上の紺」は、くっつけて読む。つきぬけるような青天とは、昔から云う。それを私は「つきぬけて天上の紺」と云ったのだ。そんな青天に、まんじゅしゃげは、紅い葉を張って、すくくと立っている。(『自句自解山口誓子句集』白鳳社 昭44・2)

・「曼珠沙華」は、「まんじゅしゃげ」と讀む。梵語で、天上の花といふ意味であるが、日本では、死人花とか、幽霊花とか云はれて、嫌はれの花である。この句は、保養地の伊勢の富田で作った。私は、気を紛らすために、毎日、出歩いて、曼珠沙華の美しい花に見惚れた。天は澄んで、突き抜けるやうに青い。その秋の天の下で、真紅な曼珠沙華が立っているのを見て私は慰められたのだ。「つきぬけて」を、曼珠沙華が秋天を突き抜けて立っていると解釈した人があったが、曼珠沙華は天を突き抜けたりはしない。

ここで、特に注目したのは、「つきぬけて」を、曼珠沙華が秋を突き抜けて立っていると解釈した人があったが、曼珠沙華は天を突き抜けたりはしない。」という誓子の言葉である。「つきぬけて」を「曼珠沙華」に結びつける解釈を否定しているのである。誓子がこの句を作ったのは昭和一六年、それから二八年後の自解と五〇年後の自解に揺るぎがない。誓子の中では、あくまでも「つきぬけて」は曼珠沙華とは結びつかないのである。

七、まとめ

俳句という短詩型文学では、五七五という基本的な「句切れ」がすでにリズムを生み、韻文性を高めている。この「句切れ」に意味上の「切れ」や「切れ字」が加わると、リズムに変化が生れ、韻文性も更に高まるのである。この俳句の技法は、外山滋比古の言葉を借りれば、「言葉に豊かな余韻を生」じさせるために必要な方法である。このような「切れ」を意識しての鑑賞指導について提案したのが今回であった。

しかし、今回提示した「つきぬけて天上の紺曼珠沙華」は難しかったようだ。やはり「や」「かな」「けり」のような「切れ字」の「切

れ」から指導に入るのがよいであろう。例えば、

名月や男がつくる手打そば 森 澄雄

などはどうであろうか。この頃は「食」に関心が寄せられているし、男の料理にも話題が及んで生徒も興味を持つに違いない。

切れ字以外の「切れ」の方では、

月天心貧しき町を通りけり 蕪村

一月の川一月の谷の中 飯田龍太

はどうであろうか。前者は、上五で切って、月は中天にあり、作者は貧しき町を通っていく、の意で、「切れ」がはっきりしている。

後者は、一月の川は一月の谷の中、の意で、単純な「切れ」である。そしてこの句は、〈○〉一月の川（は）一月の谷の中〈○〉というように句の前後に大きな余白が広がっている。大空間に一月の川と谷があるのである。この句も難しいかも知れないが、前後の余白に自由にイメージを膨らませることができ、余白を読む力を育てるには適していると思われる。

「切れ」によってできた余白を読む俳句の鑑賞指導によって言語感覚を磨き、読解力を養うこともできると考える。